

2023年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2024/9/30

団体名	NPO法人チャリティーサタロ	活動タイトル	体験支援を入り口とした継続的な家庭支援の仕組みづくり事業		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■活動風景		
●地域の望ましい社会状況（ビジョン）	「子どものために大人が手を取り合う社会」 社会全体で子どもたちを支え、子ども時代に自己肯定感を育む経験が、環境などの要因に関係なくどの子にも権利として与えられている社会をめざす。	子どもへのアンケートにより得られた回答			
●団体の社会的役割（ミッション）	子どもたちが何かに立ち向かうとき・悲しみから立ち直るとき、支えになるのは、周囲の大人や社会から「確かに愛されていた」と感じられることだと考える。子どもたちが困難や逆境があっても、エンパワメントできるように「親や周囲の大人からいかに愛されていたかがわかる」機会の創出をするため、すべての大人が子どもたちのために働きかけられる社会をめざすこととした。		研修の様子 今年度は学生インターンと一緒に企画運営を実施した		
●団体の活動基盤	「子ども達に愛された記憶を残すこと」 家族での体験や誰かに認められているといった思い出を届け、自己肯定感や社会との連帯感の醸成に寄与する。 経済的困難な状態にある家庭の子どもにおいては、クリスマスやサンタクロースといった社会的認知度が高いイベントを通じ、家庭が社会と繋がれる入り口としての役割を担う。 また社会の課題解決に賛同する企業・団体と一緒に事業を考え行動をとることで、相互理解を深め包括的・継続的な支援体制づくりにつなげていく。そのことにより、ビジョンにある「社会全体で経済的困難な子どもたちを支える」機運を高める。			■活動成果のアピールポイント（自由記入）	<p>この1年間の活動を通じて</p> <ul style="list-style-type: none"> 年間を通じて家庭に支援情報を届けること 体験支援による状態変化の確認（保護者） <p>を達成しました。</p> <p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <p>年間の体験支援を届けている中で「次は自分が助ける側に回れるようになりたい」「大きくなったらスタッフになってサポートをしたい」と言ってくれる受益者がでてきている。</p>
■活動報告		■1年間の目標に対する達成状況（まとめ）			
<p>①クリスマス活動を起点とした困窮家庭の掘り起こし・分析事業</p> <p>クリスマスの活動の事前と事後に保護者のアンケートを取り比較分析を行った。「社会で支えてくれる存在の有無」の設問については、事前アンケートで「あまりそう感じない」「全くそう感じない」と答えた人の約60%が事後アンケートでは「少しいると感じる」「いると感じる」を選択していることが分かった。</p> <p>②年間を通じた体験活動への橋渡し、ならびに支援情報の提供、体験を通じた子どもの状態変化の調査</p> <p>誕生日支援をきっかけに子どもへのアンケート調査を行った。子どもアンケートを実施し2024年8月時点で1540世帯1629人の子どもにアンケートを送付し408人（小学生328人、中高生80人）から回答が来ている。</p> <p>③企業連携ならびに支援団体との連携</p> <p>今年度は286団体と連携。この助成金を活用しながら3年間実施してきた内容について取りまとめ報告を行い、今後より深い協力ができるように呼び掛けた。</p> <p>④スタッフ研修の実施</p> <p>3月と6月にボランティアのリーダー層に向けた研修を行った。6月はケースワークを行い、様々な家庭に寄り添う事について検討した。</p>	<p>①クリスマス活動を起点とした困窮家庭の掘り起こし・分析事業</p> <p>職員の中で困窮家庭の判断基準の整理を行い、より多くのスタッフが判断を行えるように体制を整えた。自由記述から自動でアラートを出す仕組みはまだ情報の蓄積が足りていないので、引き続き情報を蓄積していく。</p> <p>②年間を通じた体験活動への橋渡し、ならびに支援情報の提供、体験を通じた子どもの状態変化の調査</p> <p>具体的な変化の傾向はまだつかめていないが、より困難を抱えている子ども達へのアプローチを検討して実施した。</p> <p>また家庭のニーズに応える形で新しい事業として長期休みの思い出支援企画をスタートさせた。</p> <p>③企業連携ならびに支援団体との連携</p> <p>困窮家庭の支援のための連携についてどういう仕組みを作っていくかのイメージ共有を団体に向けて実施した。仕組みの構築に向けて連携レベル分けの基準を検討した。</p> <p>④スタッフ研修の実施</p> <p>ワークショップを2回実施し、スタッフの家庭に寄り添うための姿勢やそのための考え方を身に着ける機会を作ることができた。</p>	■望ましい社会状況を達成するための課題	<p>・資源物質（人・もの）がエリアによって偏りがあり、私たちが連携できる先についてもエリアによっては十分ではない。今後は、より多くの家庭に安定して情報を伝えられるようにするために、毎年多くの家庭からの声に対して、スタッフの経験レベルを問わず、生活困窮度の高い家庭の記述に気づける仕組みづくりと、全国各地の子ども支援団体との連携の強化が必要である。</p> <p>・今回、子ども達の声アンケートで聞く中で、保護者を経由せず子ども自身に支援をつなぐことの難しさを実感した。子どもからSOSが出た際に、適切な情報へ繋がられるよう態勢を整える必要がある。</p>		
■事業を通じて得られたノウハウ			■望ましい社会状況を達成するための課題		
<p>・アンケートを通じた子どもの声の収集</p> <p>→体験を通じた状態変化については継続調査が必要であるが、設問を工夫することで「家族には相談しにくい悩みや困りごと」などを発掘できる方法になった。今後は、そういった困りごとを抱えた子ども達とどのようにコミュニケーションをとり、適切な支援に繋げていくかを検討していく。</p>	<p>・資源物質（人・もの）がエリアによって偏りがあり、私たちが連携できる先についてもエリアによっては十分ではない。今後は、より多くの家庭に安定して情報を伝えられるようにするために、毎年多くの家庭からの声に対して、スタッフの経験レベルを問わず、生活困窮度の高い家庭の記述に気づける仕組みづくりと、全国各地の子ども支援団体との連携の強化が必要である。</p> <p>・今回、子ども達の声アンケートで聞く中で、保護者を経由せず子ども自身に支援をつなぐことの難しさを実感した。子どもからSOSが出た際に、適切な情報へ繋がられるよう態勢を整える必要がある。</p>		■活動成果のアピールポイント（自由記入）	<p>この1年間の活動を通じて</p> <ul style="list-style-type: none"> 年間を通じて家庭に支援情報を届けること 体験支援による状態変化の確認（保護者） <p>を達成しました。</p> <p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <p>年間の体験支援を届けている中で「次は自分が助ける側に回れるようになりたい」「大きくなったらスタッフになってサポートをしたい」と言ってくれる受益者がでてきている。</p>	